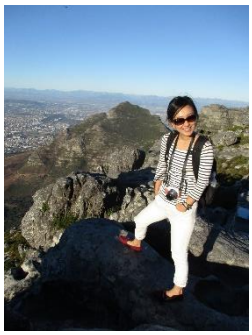
Tamanga Ran! Vol.7 2017.6.7

青年海外協力隊　マラウイ派遣　本田　藍

帰国まで後 1 か月となりました！早く帰ってあったかいお風呂に浸かって美味しい日本食を食べて家族と友達に会いたい、停電と断水に悩まされない日々に戻りたい…と思う反面、活動もいよいよ終盤に来て私はこの 2 年間何をしてきたんだろう、まだやりたかったことが…と焦る気持ちとが入り交ざり、複雑な心境です。最近のマラウイは寒い季節となり、朝晩冷え込む日が続いています。ここ 2、3 日は朝裏の山に霧がかかり、小雨のような感じです。日中も日が出ても気温が上がらず、みんなセーターやダウンを来て過ごしています。「日本は冬があるから藍にはこれは寒くないでしょー」と先生たちに言われますが、暖房なしではなかなか辛い寒さです。



＊左：世界三大幕府・ビクトリアの滝 in Zambia　中：満月の時だけ現れるルナレインボー　右：テーブルマウンテン in South Africa

◎今月の活動～マラウイの小学校の一大イベント MANEB って？～

「来週は丸々1 週間学校ないよ～」先月末、活動も大詰めに来たところで、ある先生に言われました。理由は 8 年生の卒業認定国家試験（Malawi National Examination Board=通称：MANEB ）があるため。あと何回授業できるか数えて、計画立ててたのに…と思ったことは置いといて、MANEB について少し。その名の通り、最高学年である 8 年生が卒業認定試験として受けるのがこのテスト。合格すれば卒業、不合格なら留年となります。さらにこの試験結果に基づいてセカンダリースクール（日本の高校にあたる）に行けるかが選抜されます。新年度が始まる 9 月頭、教育省から試験結果が一斉に発表され、合格したか、セカンダリーに行けるかが決まります。試験結果の上から順に National Secondary School(国立の全寮制)、Secondary school(県立の全寮制)、Community Day Secondary School(市立の通学制)に振り分けられ、合格したけど選抜されなかった生徒たちは、各学校が午後に行う Open Day School に通うことになります。

セカンダリーに行ける生徒は小学校の就学児童数の約 20%と言われていますが合格率自体は 60～70%。セカンダリーに行くことは本当に狭き門。高校に行かなければ、当然その先の進学も望めません。さらにせっかく選抜されても高校からは学費がかかるため、これが払えずに進学を断念する家庭も少なくありません。また、留年と簡単に言っても彼らはまだ 14，15 歳の子ども。リピートするのは恥ずかしいし、気も進みません。生徒数が多すぎて学校から強制力を働かせることもできない。よって、よほど教育熱心な家庭の生徒以外は、この試験を最後に学校を離れてしまいます。たまに、合格してセカンダリーにも選ばれたけれど、よりレベルの高いセカンダリーに行くために 8 年生をやり直している生徒もいますが、このケースは本当に稀です。この数字から、マラウイで大学まで出ることがどれだけ難しいか、どれだけエリートかわかると思います。

日本のセンター試験よりも彼らの人生を大きく左右するんじゃないかと思われる MANEB、去年一緒に授業をしていた子どもたちが受けたので、一人でも多くの生徒に、進学してほしいなと思います！

＊左：同じコンパウンドに住むちびっ子たち　右：MANEB の試験配布の様子

◎世界に広がる”UNDOKAI’

2020 年の東京オリンピックに向けて、文科省を中心に Sports for Tomorrow というプロジェクトが動いています。その一環として、マラウイでは日本の運動会を広める活動が行われており、教員向けの研修会なども実施されています。そのプロジェクトの一環だった訳ではないのですが笑、先学期の終わりに私の巡回校の一つでも運動会を実施しました。目的は、日ごろ授業で行われることのない体育の実技指導を促進すること、人と協力して目標を成し遂げることの大切さ、大変さ、楽しさを経験を通して学んでもらうこと。

生徒数約 2000 名の学校で、4～8 年生の生徒から各 40 名ずつを選び、計 200 名で行いました。これまでの経験から、日本のように 1 か月前から少しずつ準備して練習して、という方法は彼らのやる気と興味を失ってしまうのでここやり方には合わないと判断し、短期集中型の 3 日間の放課後練習の後、4 日目に本番、というスケジュールを組みました。競技は、4，5 年生が台風の目、6 年生が二人三脚、7，8 年生が騎馬戦、最後に選抜メンバーによるリレーです。

*上：騎馬戦　左下：一緒に頑張ってくれた教育実習生　右下：リレー

一番大変だったのは、生徒よりも先生たちを動かすこと(笑)もともと学校にあるスポーツ委員会の先生を中心に各競技担当を分担して練習しようと思ったのですが、これがなかなか難しい。なぜなら、先生たちも人と協力して、分担して仕事を行う、という経験が全くなかったからです。

0 日目：チーム分けとデモンストレーション。事前に選んだはずの生徒が、お腹が空いたなどの理由で約半分来ない。デモンストレーションのはずが、先生たちが目新しい競技に楽しくなってしまい「私もやりたい！」「私も！」と殺到し、生徒たちに結局何をやるのか伝わらない。

1 日目：学校につくと、先生たちのランチ中。「お腹が空いてたら運動できないからね！」と。生徒たちは朝から何も食べずに待ってるんだけど…。昨日できなかったチーム分けをしたかったが、雨が降り出し出来ず。教室でやればよかったと後で気付いたが時すでに遅し。「雨＝何もできない」というマラウィアンと同じ思考になっている自分に気付く。結局雨の中日本人 3 人と校長先生だけで校庭に 200m トラックをロープと木の棒と鍬を使って掘る。人生初めて手の豆がつぶれる。思っていたよりかなり痛い。

2 日目：事前にチーム分けし、ようやく練習開始。予め競技ごとに担当教員を決め、仕事を分担したにも関わらず練習が進まない。それぞれが私に何をすれればいいのか聞きに来る。何とかとりあえず生徒は競技内容を練習できたのでよしとする。

3 日目：昨日の反省を活かし、事前にミニ打ち合わせ。教員一人ずつに全員の前で仕事を確認してもらい、それから生徒のもとへ。JICA Malawi の所長が当日来ることを伝えるとみんな慌

左：二人三脚　　右：台風の目

ててやる気になる。生徒は毎日違う子が来ていることに気付いたが、この際人数が合えばいいと目をつむる。練習中、気づくと先生たちが消えている。

本番：朝から突然保健省の人が住血吸虫の検査のためアポなし訪問。授業がなくなった生徒は下校してしまう。午後から運動会なのに…。加えて 7 年生の女子生徒を対象に行われているプロジェクトの関係で、7 年生女子全員が出かけていく＝7 年生チームの半分がいなくなる。焦る私をよそに、「みんな戻ってくるから大丈夫よ～」と気楽な先生たち。意外にも先生たちがやる気満々で着々と準備が進み、村長、その他お客さんも来ていただき、まさかの時間通りの開催。本番に強いとことはわかっていたが、スムーズに進みすぎて、すべての競技が 20 分で終了したのは予想外(笑)そこに所長が到着。マラウイタイムと思っていた所長も驚く。先生が一言、「もう一回やろう」笑。と、いうことですべてもう一度やることに。

ありがたいことにテレビの取材にも来ていただき、後に全国放送もされ、これも彼らのやる気を大いに引き出してくれました。また、彼らのポテンシャルの高さに脱帽！一列に並んだり、グループを作ったりするのは苦手な生徒ですが、どの競技も初めてだったのに 2，3 回の練習で、とても高いパフォーマンスをしてくれました。友達と協力して頑張ることを経験してほしかった中で、同じチームの先輩後輩を一生懸命応援したり、リレーでバトンを落として悔し涙を流している女の子の姿が見られたことは私もとても嬉しかったです。先生たちは来年も続けてやりたいと言っていたので（自分たちだけでオーガナイズできるか不安しかありませんが）続けてくれることを願って…！！

AN

—Awesome　Notice—

https://awesome-notice.com

協力隊生活もあとわずかになったところですが、友人がブログを立ち上げてくれ、記事を書き始めました。私のみならず、教育、民間、様々なところで活躍している仲間が記事を書いていく予定です。ぜひ一度覗いてみてください！

◎らんのつぶやき

後一か月で日本に帰ると思うと複雑な気持ち。もうそろそろマラウイもおなか一杯、ようやく帰れるという気持ちと、親しくなった友達や子どもたちと離れるのが寂しい気持ちと。今まで一緒に活動してきた人たちに「なんで帰るんだ、もっとマラウイにいればいいじゃないか」「あなたはもうマラウィアンだから帰らないよ」と言われると、嬉しくなるし実際そう言ってくれる人がほとんど。しかし、ここでも生活を振り返ると、改めて大変なことも多かったなと思う。アメリカに留学していた時に感じた、言葉の壁や人種差別とはまた違った大変さ。外国人として、どこか日本と似た閉鎖的で保守的な黒人社会の中での生活。

中国人をよく思わない、からかう人たちから毎日のように浴びせられる「チャンチュン！マチャイナ！」の揶揄。（もらえたらラッキーぐらいで）外国人を見ると「ギブミーマイマネー（Give me money)」と言ってくる子どもたち。「I love you, I want you」「お前と結婚するから日本に連れていってくれ」と挨拶代わりにしつこく言ってくるニートの男たち。道ですれ違いざまに「お金がないから助けてくれ、仕事をくれ」と言ってくる女性たち。肌の色で怖がって泣きわめく赤ちゃん。普段から一緒にいる同僚でも、外国人だからか持っているもの、新しく買って身に着けているものなど、いつも細かくチェックされていて、「私にちょうだい」と言われる。

確かに貧しいものわかる、物がないのもわかる、海外の情報を得る手段がないからマラウイのことしか知らないのもわかる、外国人ならお金を持っていると思うのもわかる、本当にお金がないのもわかる、かわいそうだとも思う。

でも！！毎日のようにこれだったらしんどいと感じることもある。心に余裕があるときは、笑ってジョークで返せる。でももちろんそうじゃない時もある。余裕がないときはこれらを避けるために家から出ないこともあるくらい。本当に悲しくなったり腹が立ったりする。いくらボランティアだからって、そこまでお人よしばかりできない。同僚に相談しても、「彼らは冗談言ってるだけだよ、君と話したいんだよ」って言われる。そうかもしれないけど、毎日外を歩く度に言われるこっちの身にもなってみて！と思ってしまう。

不満のようになってしまったけど、別にマラウィアンを非難したいわけではない。私が選んでここに来たわけだから。ただ、外国人として、アジア人の女性として、アフリカの小さな街に住むとこんな感じなんだな、こんな大変なこともあるんだなーってこと。

*アフリカ、アジア計7か国の隊員と連携してプロジェクト「アートは国境を越える」を通じて絵画の交換をしました。モンゴルから届いた絵に喜ぶ生徒たち

＊8年生ドッジボール指導。コートは木の枝と葉っぱで手作り！

◎編集後記

いつも「あ、これニュースレターに書こう～」と思うことはたくさんあるのに、気づくと時間は過ぎていて。毎回自分の仕事の遅さを反省していました。。。特に去年の乾季は1日のうち夜中の 0～3,4 時しか電気が使えない日々が続いて、パソコン、携帯をチャージするのですらやっとの状態。必要なメールの返信、書類作成もできない状態で、ニュースレターの作成が滞ることもありました。

もしかするとマラウイから送る最後のニュースレターになるかもしれないので、いつか書こうと思っていた、タイトルについて。”Tamanga”はマラウイの共通語・チェワ語で”Run”を意味します。私の名前とかけて、2年間止まらずに走り続けよう、という思いを込めました。もっとも、こういうネーミングセンスがないので、他にかっこいいタイトルが浮かばなかっただけというのもあるのですが。笑 2 年間走ってこられたかなーと思うと、答えはんー。。。アフリカに来たからと言って劇的に自分が変わることはありません。走っては止まり、迷い考え、でもやっぱり走るしかない、の繰り返しだった気がします。しかし、毎回ニュースレターを読んだ一人ひとりからいただくコメントに本当に元気づけられ、私は一人じゃない、と支えられていました。それが楽しみで続けてこられました。ありがとうございます。

たまに、友達の昇進や結婚の話を聞いて、日本にあのまま残っていたら…と思うこともありますが、3 年前協力隊に、アフリカに来ることを迷いに迷って、決めた自分は間違っていなかった、と今は心から思います。やらずに後悔はしたくないといつも思っている私。20 代の貴重な 2 年間をアフリカで過ごすことにはもちろん多少の犠牲もありましたが、ここにきたことで見られた援助の実態、援助を受ける人々の考え、アフリカ文化、多様なキャリアパス、人生の楽しみ方、国を超えて得られた人脈など、得られたものは本当に大きいし学んだことも多くありました。

残り 1 か月、きっと目まぐるしく過ぎていくと思いますが、最後まで健康で安全に気を付けて、最後まで走り続けたいと思います！